

氏名(本籍)	おお 大 坪 慈 (神奈川県)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博甲第2981号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	フランシスコ・ゴヤのタピスリーカルトン研究
主査	筑波大学教授 Dr. Phil 中山典夫
副査	筑波大学教授 三神弘彦
副査	筑波大学助教授 博士(芸術学) 五十殿利治
副査	愛知県美術館副館長 雪山行二

### 論文の内容の要旨

中世以来の長い伝統を持つ西欧タピスリー芸術は、18世紀の第4四半期に、スペイン王宮の室内装飾として国家主導の最後の繁栄期を迎えたが、この繁栄にタピスリーの原画作者として顕著な貢献を果たしたのは、画家のフランシスコ・ゴヤであった。彼は1775～80年と1786～92年の二期にわたりマドリードのサンタ・バルバラ王立タピスリー工場のために総計64点のタピスリーの原画を制作したが、これらの原寸大の下絵は指定された王宮の部屋のために六組の連作として描かれた油彩画であった。本論文は、ゴヤのタピスリーカルトンと通称されるこれらの油彩原画を直接の研究対象として、これをタピスリー芸術の伝統と特性に照らして考察し、各連作の構想と内容を個別のかつ実証的に究明することによって、この時代のスペイン王宮における室内壁面装飾の発展の実態を浮き彫りにすることを目的としている。論文は7章から構成され、その前後に序章と終章が加わり、別冊として64点の図版を収録したカタログが添付されている。

序章において著者は研究の視点と目的を明示し、またゴヤのタピスリーカルトン研究の基本的課題として、(1)連作を構成する組作品の点数と該当作品を特定する問題、(2)制作依頼の手順、制作工程に関する問題、(3)ゴヤの独創の範囲の問題が存在することを指摘している。これらの問題は第2章以下で各連作について検討されることになる。

第1章では18世紀スペインにおけるタピスリー芸術の社会的背景と史的展開が考察され、1759年に即位したカルロス3世の治世期にタピスリー芸術の技術と画題の両面で重要な改革が進行したことを明らかにしている。すなわち、堅機を導入による織りの技術の高度化、染色工場の開設に伴う染料の開発と色彩の豊富化、色面が接する部分を微妙な調子に処理する織りの技法の洗練が進められ、また装飾の場所が都市の王宮から田園の離宮に移った事情も手伝って、タピスリーの画題の選択が神話画・歴史画・宗教画という美術アカデミーの画題ヒエラルキーにおける高位のものから風俗画という低位のものに移ったことが論述されている。ゴヤはこのような状況の中に登場した。

第2章ではサン・ロレンソ宮(通称エル・エスコリアル宮)のカルロス3世の皇太子夫妻の食堂のために描かれた狩猟を主題とする第一の連作について考察されている。まず、史料考証によりこの連作がゴヤとラモン・バイェウとの共同制作であること、ゴヤの作品が9点、ラモンの作品が5点であることを明らかにし、各作品の内容が説明されている。ちなみに本研究で扱われる史料は、王宮室内装飾の計画立案後に工場監督、カルトン画家、

絵画監督、主席宮廷建築家、王室会計係、財務官の間で交わされる書簡・報告書である。次に主題の考察では、白馬の騎士の狩猟の一日を物語風に表した、フランドルタピスリーの主題の定型の1つ「ウォウエルマン風」が解釈し直され、同時代に舞台を移した狩猟の一日の光景が描かれていること、そこには絵画監督アルトン・ラファエル・メングスの意向が反映されていることを論述している。

第3章ではエル・パルド宮の皇太子夫妻の食堂のために描かれた第二の連作について考察されている。史料考証では、ゴヤが初めてこの連作から、作品提供の書簡に「自身の創意による」という一節を加えるようになったことを挙げ、その意味を、画面構成や群像配置を自分の考えで行うことであると解釈している。また、作品の点数については1776年から78年にかけて4回に分けて提出された《ピクニック》を初めとする10点としている。主題については、農民の一年の歳時記を表したフランドルタピスリーの伝統的テーマのもう一つの定型「テニールス風」を解釈し直した庶民の日常風景であり、各場面が寓意や象徴の意味の連想によって結びつき、究極的にはカルロス3世の啓蒙主義政策によって進行する近代化とその下で人生を謳歌する庶民の活力ある暮らしぶりが浮かび上がることを論述している。造形面の考察では、群像表現に関するメングスの構成の理論が生かされていることを具体的に検証している。

第4章の考察対象は、エル・パルド宮の皇太子夫妻の寝室および寝室控えの間のために描かれた第三の連作である。ゴヤの六連作中最も規模が大きく、1778年から80年にかけて4回にわたって提出された作品数は《盲目のギター弾き》を初めとして20点を数え、現存する史料の種類や量も最も豊富である。主題の考察では、連作の統一主題が部屋の用途に合致した男女関係、恋愛模様であり、さまざまな階層に属する人々を扱う中でスペインの国家的繁栄が暗示されていることを論述している。次に室内装飾としての統一構想の問題が考察され、アルナイスおよびトムリンソンの先行研究を検討した上で、時計回りの原則による装飾配置という独自の見解を打出し、それに基づく統一構想の復元案を提示している。さらに、大型画面10点についてタピスリーとカルトンの間の遠近表現の比較分析が詳細に行われ、構図や配色の面でゴヤはタピスリーの特性を十分考慮に入れた表現を行ったと結論づけている。

第5章では、7年間の休止後エル・パルド宮のために描いた四季を主題とする第四の連作について考察されている。ただ、装飾目的場所が皇太子の食堂の間か国王の談話室か史料からは判断できない。作品数が13点であることから、人間の年齢、精神の成熟の段階という啓蒙主義的発想を四季に融合させているとの見解を示している。装飾配置の問題では先行の諸案が検討され、アゲーダの案に賛同している。造形面の考察ではカルトンとボセト（先行して描かれる縮小原画）を比較し、表現内容の変化について述べている。

第6章では、エル・パルド宮のアストゥリア皇太子の3人の娘たちの寝室のために計画された第五の連作が考察されている。主題として聖イシドロの祝日の情景が採用され、《サン・イシドロの牧場》を含む5点のボセトが描かれた。しかし、カルロス3世の死によって計画は途中で放棄された。該当の部屋と装飾構想についての考察では、著者はグレンディニングの案を適切と判断している。造形面の考察では《サン・イシドロの牧場》に見るパノラマ的風景表現に着目し、その発想源を詳細に分析している。

第7章ではサン・ロレンソ宮の国王執務室のために計画され、未完に終わった第六の連作が扱われている。《村の結婚式》を含む6点のカルトンが現存するが、著者は史料の分析から12点組の連作と推定している。主題は虚栄心であり、因習を固守する古い階級社会への風刺であると考察している。

終章ではタピスリーカルトンの画題、構図および配色、連作を構成する作品数、ゴヤの独創の範囲の四点について総括が行われ、特に最後の点について、第二から第五までの連作では構図を組む段階からゴヤの独創と考えられ、彼が宮廷画家に任命された後の第六の連作では画題の選択も彼自身の考えで行われた可能性が大きいと結んでいる。

## 審査の結果の要旨

一般にタピスリーの原画は、タピスリーの完成にともなってその役目を終え、倉庫に眠る運命にある。事実ゴヤの原画の多くもそうであった。それらが日の目を見たのは、19世紀中葉に興ったゴヤの再評価の気運によってである。今日ゴヤの原画の大部分はプラド美術館に展示されているが、これらの原画は外観上は額絵としての油彩画と全く区別がつかない。そのため従来の研究者の多くは、これをタピスリーの下絵と知りつつ、ゴヤの額絵の系列に組み入れてこの画家の作風の展開を解明する手懸かりとしてきた。しかし、当初の制作目的を重視するならば、ゴヤのタピスリーカルトンは額絵の文脈で考察されるのではなく、むしろタピスリー芸術の文脈で考察されてしかるべきである。つまり、史料考証に基づいて完成時の室内壁面装飾の構想を復元し、改めてその中でゴヤの果たした役割や原画の内容を考察することが求められよう。本論文はこの観点の本格的に追求した希有の研究であり、その点でまず高く評価される。

本論文で注目されるもう1つの点は、関連史料すべてを網羅した視野の広さと、「要旨」には示し得ない史料分析の精緻さであり、特に今日までカルトンの作品提出書と見なされてきたゴヤ自身の作品内容・寸法・希望価格を記した書簡をボセトの提出書と考える著者の見解は、基礎的な事柄であるだけに価値ある新知見として大いに評価される。

なお本論文ではゴヤのカルトンに基づいて制作されたタピスリーについての情報が限定的にしか示されていないが、王室の所有という制約を考慮すれば現状ではやむを得ない面があり、論文全体を評価するならば、独自性の豊かな卓れた研究成果として高く評価される。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。